

〈研究ノート〉

アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察

—研究ノート2—

九里 秀一郎[※]

要約

この論文はアウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する一連の考察の一つである。本論では、三位一体論の第15巻17章から21章までの論証、及び関連する第8巻の論証が確認される。彼は、「父・子・聖霊」が人間の「記憶・知解・意志」と似ていることを主張した。この考えは三位一体の神の心理学的類比と呼ばれる。本論では、意志または愛と聖霊の類比、及び意志の善悪について論じられる。第8巻にある彼の三位一体論の序論では、「愛する人 愛されるもの 愛」という三位一体の要素について論じている。この三つの要素を聖書と人間の精神において探求する彼の方法は非常に独創的である。従って、彼の理論と社会福祉との重要な接点の一つが隣人愛であることは明らかである。彼の理論を具体的に検討した結果、多様な価値観のある世界で互いに愛し合うためには、信仰に加えて、隣人愛の多様な形を見つける必要があることが明らかになった。

キーワード アウグスティヌス 三位一体論 キリスト教社会福祉

目次

1. 序論
2. 方法
3. 結果
 - 3.1 聖霊と愛
 - 3.2 聖霊と意志の類比
 - 3.3 三位一体論の論証
4. 考察
 - 4.1 愛の三位一体論
 - (1) 愛の原理と精神の三一性モデル
 - (2) 愛の原理と自然科学の類比
 - 4.2 三位一体論と救いの信仰
 - 4.3 三位一体論と社会福祉の接点
 - (1) 最も小さい者への愛
 - (2) 異邦人への伝道
5. 結論

- 付録**
- 1 「三位一体論」第15巻ノート2
 - 2 「三位一体論」第8巻要旨

1. 序論

本論は、アウグスティヌスの三位一体論¹と社会福祉の接点に関する一連の考察の一つである²。三位一体論で論証されたことがらを検証し、信仰と理性の融合したキリスト教の視点に立って、三位一体論と社会福祉の接点を探る、他に類を見ない試みである。この研究ノート2では、第15巻ノート第4部「三位一体の愛」(第17～21章)を扱う。

さて、キリスト教会はアウグスティヌスの時代に基礎が固まり、その後11世紀に東西に分裂³、16世紀には宗教改革⁴によりカトリックとプロテスタントが誕生した。このようなキリスト教の歴史的な変遷において、彼の思想は常に新しい神学の源泉と言われている⁵。本研究では、すでに知られている彼の膨大な業績の中で、以下の点に注目している。

1) アウグスティヌスは、信仰と理性の両面による認識の重要性を示した⁶。この認識は「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。」(ロマ1:20)という、パウロの言葉に由来する⁷。「理解するために信じること」と「信じるために理解すること」という彼の認識方法は⁸、信仰と科学にもとづき真理を探究する方法である。科学が発達して人間が本来持っている宗教性が見えにくい現代社会において、信仰と理性の両面から平和で持続的な世界を探求する視点として注目している。

2) アウグスティヌスの三位一体論は心理学的類比⁹とも呼ばれ、三位一体の神の類比を人間の精神に求めた。精神の記憶と知解と意志の一体性が神の三位一体と似ているというモデルである¹⁰。聖書には神を父、子と表現する擬人化や、天の国をからし種に例えて語る(マタ13:31)など、教えを分かり易く伝える手法が多く使われている。精神の三一性モデルが、難解と言われている三位一体論を、記憶力、理解力、意志の力という¹¹、現代人にとっても身近な類比で理解させてくれる点に注目している。

3) アウグスティヌスの「三位一体論」では、「愛する人 愛されるもの 愛」という関係を聖書と人間の精神に具体的に探求する。彼の三位一体論は隣人愛と密接に関係している神学である。著名な政治哲学者ハンナ・アーレントは、彼の言う隣人愛では、神に対する愛と相反すると主張する¹²。辻学は、福音書では隣人愛の記述が一貫しておらず、キリスト教よりむしろユダヤ教の重要な教えであると指摘する¹³。いずれにせよ、今でも多くの関心が聖書の隣人愛に寄せられており、社会福祉との接点として最も重要な課題である。

本稿では、以上の点に注目しつつ、第4部「三位一体の愛」について考察する。本研究の目的は、(1) アウグスティヌスの三位一体論の論証を確認すること、(2) アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点について考察すること、以上である。

2. 方法

本稿では、研究ノート1と同様の方法で「三位一体論」第15巻17～21章について17)～25)に分けて要約し、短い補足を書き足してノートを作成した。(付録1) それらを第4部

としてまとめ「三位一体の愛」と題した。論証は、要約順に要点を箇条書きにして確認した。研究ノート1で「言葉」を論じた場合と比べて、「愛」は主観的な要素が多い。そこで今回は、アウグスティヌスの愛に関する基本的な考え方を知るため第8巻についても同様な方法で要約した。(付録2) 本稿では、それらを参考にして第4部「三位一体の愛」について論証の確認と考察を行った。研究ノート1と密接に関係する部分もあるが、第4部の議論に的を絞り、三位一体論の全体的な考察は残りの第5部「三位一体を見る限界」の検討を終えてから行う。

3. 結果

3.1 聖霊と愛

要約17)～23)では「聖霊と愛」について三位一体論が展開される。以下に要点を記す。

17) 聖霊が愛なる神である。(17: 27-31)

- ① 聖霊は父と子に属し、父と子が互いに愛し合う愛を示唆する。
- ② 「神は愛」とは、神から愛が私たちのところに来ることを意味する。
- ③ 子も父と同じように聖霊を発出するように、父は子を産んだ。
- ④ 記憶と知恵と愛を父と子と聖霊の3つが分担するのではない。
- ⑤ 全体と各三つのペルソナが本性において、記憶と知恵と愛の三つを持つ。
- ⑥ 分離されがたい三位一体の区別において聖霊が愛にふさわしい。
- ⑦ 神から愛が出て、神は愛だから、聖霊が愛なる神である。
- ⑧ 聖霊は人間を神と隣人に対する愛へと燃え立たせる。
- ⑨ 神がまずわたしたちを愛することにより、私たちは愛を受け取る。
- ⑩ 聖霊によって神の愛がわたしたちの心に注がれる。

18) 完全な信仰を持っていても愛が無ければ無に等しい。(18: 32)

- ① 神の賜物の中で愛に優るものはない。
- ② 山を動かすほどの信仰を持っていても、愛が無ければ無に等しい。
- ③ 聖霊が各自に神と隣人を愛する者にさせる。
- ④ 愛を持つ人は、言葉も預言も知識も持たず、何も施さずとも御国へ導かれる。
- ⑤ 愛のみが信仰を有益なものにする。
- ⑥ 愛なくしても信仰は存在し得るが、愛の実践を伴う信仰から区別される。
- ⑦ 神から来て、神である愛は固有の意味で聖霊である。
- ⑧ 神から来る聖霊によって、神の愛が私たちに注がれ、三位一体全体が宿る。
- ⑨ 聖霊は神であり、愛こそ神の賜物である。

19) 聖霊が神の賜物であることを聖書は水に例える。(19: 33)

- ① 聖霊が神の賜物であることを、聖書は水に例える。
- ② イエスを信じる人が受ける“霊”を、生きた水が流れ出る川に例える。
- ③ パウロは、霊を飲ませてもらったと言う。

- ④ イエスから与えられた水を飲む者は、決して渴かないと言う。
- ⑤ イエスが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出ると言う。

20) 主は人々に賜物を与え、人々の内で贈り物を受け取る。(19：34)

- ① キリストの賜物のはかりに従って、一人一人に恵みが与えられる。
- ② キリストが人々に賜物を与え、人々の贈り物を受け取る。
- ③ キリストは頭がその肢体に与えるように人間に賜物を与える。
- ④ キリストは最も小さい者になり人々から贈り物を受け取る。
- ⑤ キリストのすべての肢体に、聖霊なる賜物が共通に分かち与えられる。
- ⑥ 聖霊なる賜物は、各自に特有なものである。
- ⑦ 唯一の“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与える。
- ⑧ 地上に降りたキリストは、天に昇り人々に賜物を分け与えた。
- ⑨ 教会はキリストの家であり、悪魔から救いだされた人々が立てる。
- ⑩ キリストは悪魔を征服し捕虜として引き連れていく。
- ⑪ キリストは悪魔を義と権能により捕まえて人々を永遠の罰から遠ざける。

21) 聖霊は異邦人に注がれる。(19：35)

- ① 使徒ペテロはイエス・キリスト名によって洗礼を受けることをユダヤ人に勧めた。
- ② 使徒ペテロは洗礼を受け、罪を赦してもらえれば賜物として聖霊を受けると語った。
- ③ 使徒ペテロは御言葉を聞いている異邦人の上に聖霊が降るのを見た。
- ④ 神は異邦人をも悔い改めさせ命を与えた。
- ⑤ 聖書には神を愛する人々に聖霊が神の賜物として与えられる多くの証言がある。

22) 聖霊の賜物は聖霊であり、聖霊を与えられたものと神との一致がある。(19：36)

- ① 「聖霊の賜物」も聖霊に他ならず、聖霊は「神の賜物」である。
- ② 聖霊は父と子とに等しく永遠なる神である。
- ③ 父と子が聖霊を与えたからといって、聖霊が父と子より小さいのではない。
- ④ 聖霊は神として御自身を与えるように、神の賜物として与えられる。
- ⑤ 聖霊は御自身の権能により、望むままに一人一人に聖霊を分け与える。
- ⑥ 聖霊を与えるものと与えられたものの関係は支配ではなく一致である。

23) 聖霊は神であり、固有の意味で愛と言われる。(19：37)

- ① 神は愛であり、愛は神から出る。(一ヨハ4：8, 4：7)
- ② 私たちが互いに愛し合うならば、神が私たちの内にとどまり、神の愛が全うされる。
- ③ このことを神からの霊によって私たちが認識するならば霊が愛なる神である。
- ④ 神の賜物の中で愛よりも大いなるものはない。聖霊よりも大いなる賜物はない。
- ⑤ したがって、聖霊は神であり、神から来る愛である¹⁴。
- ⑥ 聖霊によって父が子を愛し、子が父を愛する愛は、父と子の交わりである。
- ⑦ もしそうならば、父と子に共通な霊を愛と呼ぶのが最も適当である。
- ⑧ 聖霊だけが愛ではないが、固有の意味で聖霊を愛と名づける。

- ⑨ 同様に、聖霊だけが霊であり聖であるのではなく、父も子も霊であり聖である。
- ⑩ 第3のペルソナが固有の意味で聖霊と呼ばれる。
- ⑪ それは、聖霊が父と子に共通であり、父と子の交わりと呼ばれるからである。
- ⑫ 聖霊だけを愛とすると、子は聖霊の子と見られて不合理である。
- ⑬ 愛は三位一体において聖霊だけのものではない。
- ⑭ 父は私たちが子の支配下に移したことから、父の愛は本性と実体そのものである。
- ⑮ 彼の愛の子が彼の実体から生まれたのである。

3.2 聖霊と意志の類比

要約24)、25)では、精神の三一性が論じられる。以下に要点を記す。

24) 精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿 (20: 38-39)

- ① 私たちの偶有的な意志のように、子を「意志の子」と言う者がいる。
- ② しかし、神は永遠であるように、そのはかりごととも永遠であると信じる。
- ③ 子を「意志の子」と言わずに、「意志そのもの」と言う者がいる。
- ④ 子が「意志そのもの」ならば、父の意志が不明という滑稽なことが起こる。
- ⑤ 独り子なる御言は、実体からの実体、知恵からの知恵である。
- ⑥ 独り子なる御言は、はかりごとからののはかりごと、意志からの意志である。
- ⑦ 聖霊を神の意志と言うならば、愛と同様に人間の意思が聖霊に相応しい。
- ⑧ 第15巻では、聖霊が神であり父や子と同じ大きさの実体であることを示した。
- ⑨ 理性的な人々が、神の三位一体を記憶、知解力、意志において認めるように勧めた。
- ⑩ 永遠で不可変の本性を想起し、直観し、欲求することは精神にとって偉大である。
- ⑪ 記憶が想起し、知解が直視し、愛が抱擁して、精神は三位一体の似姿を見出す。
- ⑫ 精神は自分が生きていること全体を三位一体に関係づけられなければならない。
- ⑬ 至高の三位一体を想起し、見、愛することによって関係づけられなければならない。
- ⑭ 至高の三位一体を想い、観想し、悦ぶように関係づけられなければならない。
- ⑮ 私たちは自己の悪徳によって悪いものに変えられた似姿も似ていると思う。
- ⑯ 精神の三位一体を神の三位一体と比較しているのではない。
- ⑰ いくらかの類似において非常な不類似を見るように語ったのである。

25) 意志または愛は記憶と知解に由来する。(21: 40-41)

- ① 父なる神は、永遠なる御言によってすべてのものを作り出した産出者である。
- ② 子なる神は、御父の御言なる神である。
- ③ 父と子を私たちの精神の記憶と知解力にいくらかは推測するように心を配った。
- ④ 思惟していなくても、知っているものはすべて記憶に帰すことができる。
- ⑤ 思惟することにより、特別な仕方での告知を知解に帰すことができる。
- ⑥ 思惟することにより、真実を見出すことを知解すると言う。
- ⑦ 私たちはこの知解したものを再び記憶の中に置く。

- ⑧ 思惟によって真実が見出され、国語に属さない言葉が記憶に生まれる。
- ⑨ この内なる言葉は、思惟によって潜在していた知解が顕在化するようなものである。
- ⑩ 内なる言葉は、知識からの知識、視観からの視観のようなものである。
- ⑪ 思惟そのものも記憶されたものへ帰還するためにある種の記憶を持つ。
- ⑫ 聖霊は強力な意志、あるいは愛に似ている。
- ⑬ 意志は、何を欲求し何を避けるべきか、知解した知識を記憶に持っている。
- ⑭ 愛は、何を為すか知らない愛はなく、知解した知識を記憶に持っている。
- ⑮ 知解力に記憶と愛が内在しているように、愛に記憶と知解が内在している。
- ⑯ 私たちは想起し愛することによって、記憶のある対象に帰還し真実の言葉を語る。

3.3 三位一体論の論証

上記の通り、第4部「三位一体の愛」の論証は、3.1「聖霊と愛」および、3.2「聖霊と意志の類比」の二つに分けられる。3.1では、聖霊に関する聖書の言葉、特にパウロが語る聖霊の賜物を根拠にして「聖霊は神であり、愛である」ことを論証する。3.2では、聖霊を神の意志と言うならば、愛と同様に人間の意思が聖霊に相応しいことを論証する。3つのペルソナと精神の3機能との類比の説明をすべて完了した後にモデルの全体像を整理する。精神の三一性モデルの要点は以下の通りである。

- ① 人間の記憶と知解と意志は、精神の三一性として一体的に機能する。
- ② 三位一体の神との類比は、記憶が父、知解が子、意志が聖霊に対応する。
- ③ 人間が言葉を使うことは、三位一体の御子の言の類比である。
- ④ 精神の三一性は人間の持つ機能であり、神を求めることにおいて神の似姿である。
- ⑤ 悪徳が神を求めることを遮るので、人間は善悪が混在した多様な存在となる。
- ⑥ 精神の三一性が真実に機能することが、人間として真実に生きることである。

ここで特に注意すべきことは、神の三つのペルソナを精神の三機能のように分担させてはならない点である。要約17)には、神なる三位一体は、三つのペルソナ全体と各三つのペルソナがその本性において、人間に見られる記憶と知解と愛の三つのものをもっているというように理解すべきであると記されている。精神の三一性モデルはあくまでも三位一体の神を人間が理解する類比に過ぎない。その限界は第5部で詳細に論じられる。

4. 考察

4.1 愛の三位一体論

アウグスティヌスの三位一体論は「愛の三位一体論」と言える。「愛する人 愛されるもの 愛」という関係を三位一体の基本的な構造としているからである。本論ではこれを便宜的に「愛の原理」と呼ぶ。この節ではアウグスティヌスの精神の三一性モデルが愛の原理から誕生したことを明確にする。

(1) 愛の原理と精神の三一性モデル

アウグスティヌスの三位一体論の序論は第8巻である。その冒頭には三位一体の神を新しい視点から探求することを、次のように語る。(付録2)

三位一体の信仰の真理は以下のとおりである。相互関係的に区別された三つのペルソナが一体となっている。個々のペルソナに言われることは全体に言われる。神の真理において、個々のペルソナは全体と同じ大きさですべて等しい。このような議論には限界があるので、今までと異なる内的な方法で探究しよう。(8：序：1)

三つのペルソナとその一体性に関する伝統的三位一体論を実に簡潔に表現しているが、一般的には何のことだか分かりにくい。続いて、三つにして一つの神を私たちの通常の時空間で考えてはならないと言う。

三位一体のペルソナは、個々のペルソナ、二つのペルソナ、ペルソナ全体において大小の関係は存在せず、真理の実体と偉大さにおいてすべて等しく、変化せず、永遠である。このような三つのペルソナを持つ神が唯一であるということを、空間、物体に対する私たちの認識で考えてはならない。(8：1：2, 8：2：3)

彼は、三位一体がいかに奇妙な存在であるか、三次元の時空間では認識できないことを明らかにして新たな方法を模索する。被造物に複数存在し、目に見えず、加えても増すことなく、究極的には一つで不変であるもの。彼はすぐに「善」を考える。善には小さな善も大きな善も無く一つの善であり、普遍性があり、既にギリシャ哲学で良く知られていたからである¹⁵。そして遂に、三位一体の可能性を「愛」に見出し、続いて理性にもとづく次の問いを発する。

しかし、誰が知らないものを愛するだろうか。私は問う。知られないものが愛され得るのであろうか、と。もし、それが可能でないなら、誰も神を知る前には愛さない。(8：4：6)

この問いから始まる考察が延々と続き、「なぜ私たちは使徒を愛するのか。」との問いに達して、次のように語る。

私たちが使徒を愛するのは、今も生きている義なる心を愛するのである。私たちは自身が心を持つから心を知り、他人の心を自身の心に基づいて知り、信じるのである。義人でない人が義人を愛するのは、義人でない人も義人を知っているからである。義とは心の或る美しさであり、義人とは何か答えられるのはその人自身だけである。しかし、義人とは何かということを想像して他人の判断で認めることはできない。義なる心になるためには、各自に形成され直視できる形相に固着することではなかろうか。私たちが義人と信じ愛するのは、自分が認め知解する形相と真理を愛するからである。彼は義人であるか義人であり得るために、自分自身のように隣人を愛する。(8：6：9)

使徒とは具体的にパウロである。義人を愛するのは、自身の中に存在する義人の形相と真理を愛するからであると言う。この義人の形相は聖書を信じて自身の心に造られたものであり、他人の判断で愛することはできない。続いて、新約聖書の二つの戒めについて、神の愛と隣人愛の関係を次のように問う。

聖書がしばしば二つの戒めの代わりに一つの戒めを置くのは理由がある。例えば、神の愛のみを語り、神を愛する人は神の愛が注がれていると言う。一方、隣人愛のみが戒めを完成するように語り、隣人を愛する人は必然的に神を愛すると言う。(8:7:10)

「神を愛する人は神の愛が注がれ、隣人を愛する人は必然的に神を愛する」という理解を聖書から見出す。さらに、「愛」を人間に内在する実体と捉え、その「愛」により兄弟を愛する関係を「愛する人 愛されるもの 愛」という一般的な関係によって表現する。

兄弟を愛することは、愛する兄弟よりも、そのように愛させる愛のほうをよく知っている。現在の、内的で、確実な神が、愛する兄弟よりも知られているのである。私たちは神を抱き、すべての神の僕を聖性の絆によって一つになし、私たちと彼らを相互に結合し、私たちを神に服従せしめるのが愛である。私は神の愛を信じ、自らの愛を見ても私は三位一体を見ない。しかし、君が私の愛を見るなら、君は三位一体を見る。君が三位一体を見ることを君に気づかせるため、すなわち私たちが愛によって善へ動かされるために三位一体を現在化しよう。(8:8:12)

自分が他人を愛する時、自分が自身の愛を見ても三位一体にならないが、他人が自分の愛を見るなら、他人は三位一体が見えると言うのである。他人が自分の愛を共有するときに一つになるという意味である。さらに、アウグスティヌスの愛の信仰告白とも言える部分が続く。

二つの戒めは、愛を愛する人は神を愛し、兄弟を愛する人は必然的に神を愛するという関係にある。兄弟を愛さないということが神を見ないことの原因である。兄弟を霊的な愛によって愛するなら、愛そのものであられる神を内的な眼で見るであろう。兄弟を愛さない人には愛が欠けているから神を愛することは出来ない。私たちと比較にならないほど神を愛し、私たちと同じように隣人を愛さなければならない。私たちは神を愛すれば愛するほど自分自身を愛するのである。私たちは神のために神を愛し、同じ愛で自分自身と隣人を愛するのである。(8:8:12)

神の愛と隣人愛の関係について、「二つの戒めは、愛を愛する人は神を愛し、兄弟を愛する人は必然的に神を愛するという関係にある。」と語る。最後の言葉、「神のために神を愛し、同じ愛で自分自身と隣人を愛する」は、アウグスティヌスの隣人愛に対する信仰告白であろう。さらに続いて、次のように語る。

私たちがパウロの言葉に心が燃えるのはなぜであろうか。私たちが神の奉仕者の生き方についてのある形相を愛しており、この形相に彼の生が一致していると信仰によって思うからである。それによって、私たちは烈しく形相そのものの愛へと促され、そのように生きることを確信して願望する希望へと駆り立てられる。かくて、私たちは心を熱くして神を愛すれば愛するほど、神において義の不可変的な形相を観る。だから、信仰はより強く愛されるように神の認識と愛に有効なのである。(8:9:13)

パウロを愛するのは、パウロそのものと言うより、自身の中にある神の奉仕者の形相を愛していると言う。第8巻最後では、「愛する人 愛するもの 愛」を精神に求めることを次

のように語る。

聖書の愛は善の愛である。愛する人と愛するもの、それらを一つにし、あるいは一つにしようとする愛がある。精神においても、愛する人と愛するものと愛がある。三位一体を問い求める場所を精神に見出した。(8:10:14)

以上が、「愛の原理」から精神の探求に至る第8巻の議論の流れである。続く第9巻から14巻では、愛の原理を様々な観点から検証し、最終的に精神の三一性モデルを見出す。「愛の原理」が基本にあり、知らないものを精神が認識する方法を探求する過程を経て、三位一体の神の類比として精神の三一性モデルが誕生している。

(2) 愛の原理と自然科学の類比

この愛の原理は、現代の自然科学の知識で言えば、自然界の基本的な二体力とよく似ている。例えば、ニュートン¹⁶の法則により、万有引力によって月が地球の周りを回る現象は、万有引力が愛の類比である。湯川秀樹¹⁷の陽子と中性子を結ぶ核力のモデルでは、核力が愛の類比である。三位一体論では、愛の原理をもとにして各種の三一性が検討されており¹⁸、さらに自然界の基本的な相互作用との類比から、本論では愛の原理をより基礎概念と考えたのである。

アウグスティヌスは三位一体論で、様々な自然の法則性¹⁹、原子論による精神の構造など²⁰、当時の科学的知見を多数参考にしている。ガリレオ²¹の地動説より約1200年も以前に、科学与信仰の密接な関係を認識していたことに驚く。その後、プロテスタントの教理を確立したカルヴァン²²は、宇宙を「神の栄光の劇場」として自然神学を推奨し、ニュートンから始まる現代物理学の発展に大きな寄与をしたことはよく知られている²³。科学は被造物に真理を探究するので、パウロの「神の永遠の力と神性は被造物に現れている。」という言葉と密接に関係する。今後も、自然科学と信仰の対話が真理の探究には必要であろう。

4.2 三位一体論と救いの信仰

宗教は人間の救いを求める。社会福祉も同様に平和な人間社会を求める。三位一体論と社会福祉の接点を考察する前に、三位一体論と救いの信仰に関する基本的な考え方を確認する。

アウグスティヌスは、第2巻～第7巻、第13巻で、旧約聖書から新約聖書に続く神と人間の歴史の中に、永遠の三位一体の神とその救いを探求している。天使、預言者、イエス・キリスト、弟子たちなどについて、聖書における人間の救いの成就を三位一体論により解釈する。聖書からはヘブライ人への手紙が多く引用されている。

神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。(ヘブル1:1-2)

この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々によってわたしたちに確かなものとして示され、更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心

に従って分け与えて、証ししておられます。(ヘブル2:3-4)

創世記の三位一体論による解釈は「告白」に記されており²⁴、神は天地創造以前から現在まで三位一体である。アウグスティヌスが第3巻の始めに、「この書物を愛してはならず疑問があれば聖書に自ら問い、知解しなければ決して信じてはならない。」と注意している。それは、聖書を三位一体の神の働きとして記述することは、あくまでも彼の聖書解釈であり、信じてはならないという意味である。これらは自らの信仰を確かめ、三位一体論を理性にもとづいて説明する営みの糧としている。アウグスティヌスは、三位一体の神が聖書の救いの歴史に働いているという信仰に立っている。

三位一体論と救いの関係は、矢内原²⁵が言うように信者にとっては大きな希望であろう。例えば、筆者には、十字架の死と復活の救いの信仰²⁶が愛の原理によってより鮮明に照らされるように思われる。父なる神が、十字架のイエス・キリストの愛によって人間を愛するところに愛の原理を見る。私たちの身近におられる復活のイエス・キリストの愛により、父なる神が私たちを愛することに愛の原理を見るのである。愛の原理が生涯から永遠に続く信仰である。次の聖書の言葉は、愛の原理が救いの輝きをいっそう増すようである。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハ3:16)

本研究は、三位一体の神の論証を確認することが目的なので、信仰に関することは若干記すに止める。

4.3 三位一体論と社会福祉の接点

社会福祉の接点として、愛の原理および精神の三一性モデルの可能性について、「最も小さい者への愛」と「異邦人への愛」の事例から検討する。

(1) 最も小さい者への愛

「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタ25:40)という言葉は、社会福祉の源流である修道院の発展に大きな影響を与えた。現代でも、この言葉を精神的支柱として社会福祉を実践する人々も多い²⁷。

彼らは、この言葉の最も小さい者をイエス・キリストと重ねる。精神の三一性モデルで言えば、最も小さい者と記憶にあるイエス・キリストのイメージが重なり、意志がそのイメージを愛する時、最も小さい隣人を知解して言葉や行動で愛するという理解である。記憶にある最も小さい者は、十字架のイエスのイメージだけでなく、「過ぎ越しの小羊²⁸」または「主の僕²⁹」かもしれない。いずれにせよ、自分自身の記憶に既にある最も小さい者のイメージを愛することにより、隣人を愛するのである。

ところが、最も小さい者のイメージが外部から感覚を通して形成されるとき、意思が様々な情念を生み出す。例えば、歪曲した憐れみの感情は、弱い者を自己の目的に利用したり支配したりする欲望を生み出すことがある。このことは、奉仕する人間が純粋な動機か不純な動機が周囲に見分けのつかない原因ともなる。あるいは、単なる感傷や信仰で最も小さい者

を愛するだけでなく、理性によって、具体的な行動によって小さい者を愛する隣人愛の形もある。精神の三一性モデルは、記憶と知解と意志の三一性によって、最も小さい者への愛が、キリストと隣人への愛の信仰、理性的な隣人愛、さらには支配欲のような様々な情念、これらすべてを身近に現実化するのである。

(2) 異邦人への伝道

精神の三一性モデルが、より多様な隣人愛の形を示す例として、異邦人への伝道を考察する。異邦人としてキリスト教以外の別の神を拝む異教徒を想定する。もちろん成果や富など、神以外のものを神の様に拝む人々も広い意味で異邦人と考えても構わない。

福音書にはイエスが弟子たちと共に民衆に神の国を宣べ伝えた多くの記事がある。イエスは異教の神を信じるサマリアまで伝道している。イエスの死後、パウロはイスラエル人以外の外国人に福音を伝えることを使命とし、晩年はローマで宣教した人物であった。伝道は隣人愛のひとつの形と考えられる。

異邦人への伝道を、精神の三一性モデルから考察してみよう。キリスト教徒は聖書から神の知識を得て信仰を持つ。信仰は、信者の記憶と知解と意志の働きに大きく支えられる。異教徒も同様に、異教の神に関する知識を、記憶と知解と意志により身に着けて信仰を持つ。キリスト教徒と異教徒が、信仰において一致することは難しい。それでも互いに愛し合うためには、愛の原理「愛する人 愛されるもの 愛」の条件が、相互に成立すれば可能であろう。その条件は、互いに共有する愛、いわば「共通の愛³⁰」である。この「共通の愛」の例が、パウロがアテネでギリシャ人に福音を伝えた説教の中にある。

皆さんのうちのある詩人たちも、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、／言っているとおりです。(使17：28)

ギリシャの神々にしても、神を愛する点において私たちがギリシャ人も同じであるという主旨である。アウグスティヌスも三位一体論で、次のように引用している。

私たちは善きものを愛す。私たちには善そのものが刻印されているから。善き心になろうと欲する時、心の中に留まっている善に向かって回心する。変わらざる善、最高の善が存在することは真理である。なぜなら、人が善を見失っても回心するからである。心は善であり、善から背く前にすでに存在しており、私たちは善の中に生き、動き、存在する。(8：1：2－8：3：5)

上記の下線部を比較すると、アウグスティヌスは「神」を「善」に変更している。これは、パウロが聖書で聖霊の働きを語る際に、旧約聖書の言葉を変更したのと同様である³¹。アウグスティヌスは、パウロの異邦人伝道における「神を愛する愛」を「善を愛する愛」に意図的に変えた。このことは、愛の原理における「共通の愛」の一つの例であろう³²。

旧約聖書の民数記には「あなたたちも寄留者も同一の規則に従う。これは代々にわたって守るべき不変の定めである。あなたたちも寄留者も主の前には区別はない。」(民15：15)とある。イスラエルの民が同一の規則を守る寄留者を受け入れていたことが記されている。パウロも、「律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。」

(ロマ7:12)と語っており、律法を守ることが旧約の「共通の愛」のひとつである。

他の例として、イエスが弟子たちを伝道に派遣する際に語った言葉に精神の三一性の例が見られる。「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」(マタ10:16) この蛇は創世記では最も賢いと記されている。登場するのは羊に例えられた弟子、狼に例えられた人々である。この羊が蛇と鳩のようになることは、弟子が記憶にある知識と知解力を十分に使用して愛を持って伝道することであろう。

同様に、イエスが愛の原理を強力な相互内在によって語る言葉がある。「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである。」(マタ10:40) 登場する人物はイエスと弟子と人々である。前半は、弟子を受け入れる人々がイエスを受け入れるとある。「愛するイエス 愛される人々 弟子の愛」という関係である。後半は、イエスを受け入れる人々が父なる神を受け入れるとある。「愛する父 愛される人々 愛のイエス」という関係になる。福音書には、この他にもイエスと弟子の間に多くの愛の原理を見出すことが出来る。

最後に、パウロの言葉で「神」を「善」に代えたのと同様な箇所が、三位一体論全体で複数見いだされる点を指摘する。以下の通りである。

パウロ 我らは「神」の中に生き、動き、存在する。(使17:28)

三位一体論 私たちこの「善」の中に生き、動き、存在する。(8:3:5)

私たちはその「生命」の中に生き、動き、在るのである。(4:1:3)

私たちはこの「創造主」においてこそ生き、動き、存在する。(4:17:23)

私たちは「神」の中に生き、動き、在る。(14:12:16)

「 」は筆者が付した。アウグスティヌスは聖句の一部を代えて、彼の思想を強調する意図があったと思われる³³。「私たちが異邦人の中に生き、動き、存在する。」ならば、「善」、「生命」、「創造主」などは、異邦人と多様な隣人愛を形成する「共通の愛」であろう。

アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点は、異邦人への伝道において密接な関係を見出すことができる。

5. 結論

アウグスティヌス独自の三位一体論は、第8巻に示されている「愛する人、愛されるもの、愛」という愛の原理を、聖書解釈と理性にもとづき、人間の精神に具体的な形を探求するものである。第15巻第4部「三位一体の愛」では、聖書によれば聖霊が愛なる神であること、精神の三一性モデルによれば意志が聖霊の類比に相応しいことを論証している。愛の原理は、神においては父と子と聖霊、精神においては記憶と知解と意志の一体性に見出される。アウグスティヌスの三位一体論は神の似姿を人間の精神に求めた点で、私たちにとって三位一体の神を身近な存在にさせる。

愛に根差した三位一体論であることから、隣人愛が社会福祉の重要な接点であることは明らかである。愛の原理、精神の三一性モデルをいくつかの具体例で検討したところ、隣人愛の現実的な課題が明らかとなった。多様な価値観が混在する現代世界において、互いに愛し合い共に生きる世界を作るため、愛の原理と精神の三一性の可能性が期待される。

凡例

- ・「三位一体論」テキストの引用は、巻・章・節をコロンで区切り（ ）内に表示した。例えば（10：1：1）は「三位一体論」第10巻第1章1節を意味する。連続する節を引用する時はハイフンで開始と終了を区切り、第15巻に限定される時は章・節のみ表示した。
- ・本文で「三位一体論」テキストまたは付録本文を引用する時は二字下げて太字とした。
- ・聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」を使用した。引用は書名略語に続いて章と節をコロンで区切り（ ）内に表示した。例えば（ロマ1：1）は「ローマの信徒への手紙」第1章1節を意味する。複数の連続する節の引用はハイフンで開始と終了を区切った。
- ・引用文献はすべて参考文献として一覧表に示し、通し番号を〔 〕で示した。例えば〔1〕p.10-12は、参考文献〔1〕の10頁～12頁を示す。

引用文献・注

- 1 〔1〕：本研究では、1975年に出版された中沢宣夫氏による日本語訳を使用した。
- 2 〔5〕：既に公表されている研究ノートを「研究ノート1」、本稿を「研究ノート2」と略記する。各研究ノート付録にある三位一体論15巻の要約を、それぞれ「付録ノート1」、「付録ノート2」と略記し、引用する時は要約番号の後に15巻該当部分を章：節で示す。
- 3 〔9〕p.465-469：11世紀の東方教会（正教）と西方教会の分裂は、「フィリオクエ」論争と呼ばれ、三位一体の神から聖霊が降る解釈の違いが原因の一つとされている。
- 4 〔9〕p.618-646：16世紀の宗教改革の指導者であるルターとカルヴァンはアウグスティヌスの三位一体論を理解していたが、信仰義認、予定の教理などの解釈の違いが教会の分裂に影響している。近年、双方の誤解は解消されてきている。
- 5 〔9〕p.456：アウグスティヌスの三位一体論はトマス・アクィナス（1225?-1274）、カルヴァン（1509-1564）、カール・バルト（1886-1968）など、多くの神学者に影響を与えている。
- 6 〔4〕：信仰と理性の相互関係について旧新約聖書を通して幅広く論じられている。章のタイトルに、第2章「わたしは知解するために信じる」、第3章「わたしは信じるために知解する」がある。
- 7 研究ノート1序論
- 8 〔3〕p.160：第Ⅲ巻20章43節に、「真なることは何か」について、「信じるという仕方だけでなく理解するという仕方でも把握することを、やみがたく熱望しているのであるから—そのうち自分がそれをプラトン派の人々の下で、我々の『聖なる定め』に背かないこととして見出すであろうと確信しているのだ。」とある。
- 9 〔9〕p.453-456：アウグスティヌスの三位一体論について分かり易いまとめがある。
- 10 筆者自身の考えを論ずる時は、精神の三一性モデルの3要素を常に「記憶、知解、意志」と表記したが、日本語訳〔1〕では3要素の表記はいろいろある。従って、付録ノートおよびそこから

の引用は日本語訳をそのまま用いているため、全体で不統一になっている。この3要素は精神の3機能というのがアウグスティヌスの基本的な規定である。例えば「記憶」には「記憶すること」、「記憶されたもの」も含まれると考えられる。アウグスティヌスは文脈に応じて「記憶」を「記憶力」、「知解」を「知解力」と、適宜使い分けているようで、3要素の表記は統一していない。知解、知解する（ラテン語：intelligentia, intelligo）については、日本語訳[1]第1巻注（7）によれば、現代の「認識する」、「知る」とは異なり、三位一体論では多くの場合「言葉を深く内的に読み解く」という原義を活かして用いているとある。英訳[10]では、「知解」の大半はunderstandingであり、他の論文ではthinkingも見られる。「知解する」ことは、「知る」、「理解する」、「認識する」ことなどを含むと思われる。アウグスティヌスは「愛は強い意志」としており、3要素の一つに、「意志」ではなく「愛」または「意志または愛」と表現する場合もある。

- 11 この表現は「私たちは通常、この三つにおいて、少年たちの資質がどのような才能を示すか、を吟味するからである。少年がより確かに、容易に記憶し、より鋭く知解し、より熱心に努めるにしたがってその資質は一層、賞賛されるのである。」（10：11：17）に由来する。英訳[10]の同じ部分は、It is usual to examine these three things in children, to see what kind of promise they show. The more easily and firmly a boy remembers things and the more acutely he understands and the keener his application to study, the more admirable is considered his dispositionである。3要素が、"remember, understand, keen application"に対応するので「記憶力、理解力、意志の力」と日常的な表現とした。
- 12 [2] p.167：ハンナは「この隣人愛にあっては、そもそも愛されるのは、隣人ではなく、愛それ自体なのである。」というアウグスティヌスの思想を理解した上で、神への愛と隣人愛は相反関係にあると批判している。
- 13 [8]：「隣人を自分のように愛しなさい。」という掟は、マタイ、マルコ、ルカ福音書で記述が異なり、旧約の律法を代表する教えとして新約に受け継がれたと論じている。
- 14 [9] p.455：「この手の分析は、明白な欠点のために批判されてきた」とあるように、必ずしも厳密ではなく、聖書には他の状況証拠があるということであろう。
- 15 [7] p.219：アウグスティヌスは回心前からプラトンの「善のイデア」を知っており、回心直後に、その思想と聖書が一致することを示す自らの期待を語っている。（注7参照）
- 16 アイザック・ニュートン（1642-1727）
- 17 湯川 秀樹（1907-1981）
- 18 第11巻で、感覚を持つ外なる人の三一性を検討している。
- 19 第3巻には、天文学、物理学、遺伝学などの内容がある。「神の意志はすべての物的なもののかたちと運動の第一の最高の原因である。」とは、力の法則と同じ概念である。（3：4：9）
- 20 （11：10：17）
- 21 ガリレオ・ガリレイ（1564-1642）敬虔なローマ・カトリックの教徒
- 22 ジャン・カルヴァン（1509-1564）
- 23 [9] p.356
- 24 [7] p.205：第13巻5章6節に「『創世記』冒頭の二節のうちに、三位一体が認められる。」とある。
- 25 [5]：序論注20参照
- 26 「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、」（一コリ15：3-4）
- 27 [6] p.163：トゥールのマルティヌス（4世紀）が裸同然で寒さに震えている物乞いに、着てい

たマントを半分に裂いて片方を物乞いに渡したところ、その夜夢の中にキリストが現れこの言葉を告げたという逸話があり修道院の奉仕活動に大きな影響を与えた。マザー・テレサは、「貧しい人々に助けの手をさしのべる度に、キリストご自身に同じことをしている。」という信念を語る。

- 28 過ぎ越しの小羊：旧約聖書（出12：7）、新約聖書（一コリ5：7）
- 29 主の僕：旧約聖書（イザヤ書53章）、新約聖書（使8：32-35）
- 30 付録ノート2：17）17：27 聖霊を父と子の絆として「共通の愛」と表現しており同じ主旨である。
- 31 付録ノート2：20）
- 32 [10] God（神）をgood（善）としている。
- 33 [10] p.449：Index of Scriptureから探すことができる。パウロの言葉（使17：28）の一部変更は重要な強調と思われるが、三位一体論の日米翻訳者はいずれもその点を注で指摘していないようである。

参考文献

- [1] アウグスティヌス，中沢宣夫訳. 三位一体論. 東京，東京大学出版会，1989，540p.
- [2] アーレント，ハンナ，千葉眞訳. アウグスティヌスの愛の概念. 東京，みすず書房，2002，265p.
- [3] 岡部由紀子. アウグスティヌスの懐疑論批判. 東京，創文社，1999，340p.
- [4] 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅，久保守訳. 信仰と理性. 東京，カトリック中央協議会，2002，180p.
- [5] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察：研究ノート1”. 浦和論叢. Vol.54, 2016-2, p.33-61 (2016)
- [6] ゴンザレス，フスト，石田学訳. キリスト教史 上巻：初代教会から宗教改革の夜明けまで. 東京，新教出版社，2002，455p.
- [7] 聖アウグスティヌス，服部英次郎訳. 告白（下），改訳初版，東京，岩波書店，2013，291p.（青805-2岩波文庫）
- [8] 辻 学. 隣人愛のはじまり：聖書学的考察. 東京，新教出版社，2010，196p.（シリーズ神学への船出01）
- [9] マクグラス，A・E・，神代真砂美訳. キリスト教神学入門. 東京，教文館，2002，804p.
- [10] Hill, Edmund, O.P.; Rotelle, John E., O.S.A.ed.. The Trinity. 2nd ed., New York; New City Press, 2015, 471p. (THE WORKS OF SAINT AUGUSTINE; A Translation for the 21st Century)

付録1

「三位一体論」第15巻ノート2

目次

第1部 第1巻から14巻で証明した真理（第1～3章）

- 1) 動物より優れた魂の特性を持つ人間が神の似姿であることを論証する。(1:1)
- 2) 論究を積み重ねて人間の精神に神を求めることに到達した。(2:2-3)
- 3) 第1巻から14巻で証明されたこと。(3:4-5)

第2部 三位一体を探究する方法（第4～9章）

- 4) 創造主に対する信仰告白。(4:6)
- 5) 神に対する言表がすべてのペルソナに当てはまるか調べる。(5:7-8)
- 6) 神に対する言表の考察を経て人間の精神の内に三一性を見出す。(6:9-10)
- 7) 人間の精神に神の似姿を見出すが人間は神の知識に到達できない。(7:11-13)
- 8) パウロの言葉「鏡におぼろに映ったものを見る」を解釈する。(8:14)
- 9) 「鏡におぼろに映ったものを見る」とは寓喩である。(9:15-16)

第3部 三位一体から生まれる言葉（第10～16章）

- 10) 心の中で思うことは神の御言と類似している。(10:17-19)
- 11) 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。(11:20-21)
- 12) 私たちの真実な言葉は記憶の宝庫から生まれる。(12:21-22)
- 13) 神は創造する以前から創造するものを知っている。(13:22)
- 14) 父から生まれた御言葉と私たちの内的に語る言葉は似ている。(14:23-24)
- 15) 内的な言葉はある種の精神に存在する旋回的な運動から生まれる。(15:24-25)
- 16) 神は人間のように思惟から言葉を生むのではない。(16:25-26)

第4部 三位一体の愛（第17～21章）

- 17) 聖霊が愛なる神である。(17:27-31)
- 18) 完全な信仰を持っていても愛が無ければ無に等しい。(18:32)
- 19) 聖霊が神の賜物であることを聖書は水に例える。(19:33)
- 20) 主は人々に賜物を与え、人々の内で贈り物を受け取る。(19:34)
- 21) 聖霊は異邦人に注がれる。(19:35)
- 22) 聖霊の賜物は聖霊であり、聖霊を与えられたものと神との一致がある。(19:36)
- 23) 聖霊は神であり、固有の意味で愛と言われる。(19:37)
- 24) 精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿。(20:38-39)
- 25) 意志または愛は記憶と知解に由来する。(21:40-41)

第5部 三位一体を見る限界（第22～28章）

- 26) 一つの人格にある三機能は、三つのペルソナの一体とは違う。(22:42)
- 27) 私たちの三つの能力が神の似姿であり神を見ることができる。(23:43-44)
- 28) 精神の三一性を信じること。(24:44)

- 29) 鈍くても、キリスト・イエスの救いが得られる。(25：44-45)
- 30) 父と子とから聖霊が発出する。(26：45)
- 31) イエス・キリストは神性において聖霊を与え人間として聖霊を受けられる。(26：46)
- 32) 時間なくして子は父から生まれ、同時に父と子から聖霊が発出した。(26：47)
- 33) 三位一体において生誕と発出を区別するのは難しい。(27：48)
- 34) 精神によって神を見るように努めなければならない。(27：49)
- 35) わが魂の眼ざしは罪のゆえに真理を見ることはできない。(27：50)
- 36) この書に書かれたものが主に由来することを祈る。(28：51)

注：ノート2は第4部のみ収録、要約部分は2字下げて太字とした。

第4部 三位一体の愛(第17～21章)

17) 聖霊が愛なる神である。(17：27-31)

聖書の言葉「神は愛です」を出発点として三位一体を検討し、聖霊が固有の意味で愛といわれることを論証する。

私たちは鏡に映ったなぞにおいて、父と子について十分に語った。次は聖霊について語る。聖霊は聖書によると、ただ父にだけ属するのではなく、また子だけに属するのではなく、父と子に属し、父と子が互いに愛し合われるその共通の愛を私たちに示唆する。

聖書は「神は愛です」と語ったので、先ず、父なる神が愛であるのか、それとも子なる神が愛であるのか、あるいは三位一体なる神が愛であるのか、ということは極めて不確かであり、それゆえ尋求しなければならない。わたしたちは聖書において「神は愛です」(ヨハ14：16)と、言われるのは、愛そのものが神の名称にふさわしい実体であるからではない。「主よ、あなたはわたしの希望。」(詩71：5)とあるように、愛は神から私たちのところに来ることを意味している。「主よ、わが愛よ」、「あなたはわが愛であります」、「神はわが愛」といわれず、「神は霊である」(ヨハ4：24)といわれるように、「神は愛です」といわれるのである。

だから、なお、愛であるのは御父か、御子か、聖霊か、三位一体御自身か—三位一体御自身は三つの神ではなく一つの神であるから—と問い求められる。私はすでに本巻のはじめで次のことを論じた。神なる三位一体は、私たちの精神の三一性において私が示した三つのものによって御父は三つ全体の、いわば記憶であり、御子は三つ全体の、いわば知恵であり、聖霊は三つ全体の、いわば愛であり、三つが分担して機能するように理解するべきではない。むしろ、三つのペルソナ全体と各三つのペルソナがその本性において、人間に見られる記憶と知解と愛の三つのものをもっているというように理解すべきである。そこでは、この三つは、私たち人間の場合に、記憶と知解と愛が別々であるように区別されているのではなく、知恵の場合のようにすべてのペルソナに有効なのである。この一つのは各ペルソナの本性において与えられており、これを持つべ

ルソナは彼が持つその同じものであり、それは不可變的にして單純な実体である。しかし、なぜ、父と子と聖霊が知恵といわれ、同時にその全体で三つの知恵では無く一つの知恵であるように、父と子と聖霊が愛といわれ、同時にその全体で一つの愛といわれいいのか私には分からない。同じように、父は神であり、子は神であり、聖霊は神であり、同時に全体で一つなる神であるというのも分からない。

しかも、三位一体において、御子だけが神の御言、聖霊だけが神の賜物、父だけが御言が生まれ、聖霊が原理的に発出したお方と言われるには理由がある。それは、子も父と同じように聖霊を発出するように、父は子を産みたまうたのである。

従って、私たちは分離されがたい三位一体の慎重な区別においてのみ、父と聖霊も知恵であるが、子が固有の意味で知恵と言われ、三つのペルソナの一つが固有の意味で愛と名付けられるなら、聖霊が愛であることにまさってふさわしいものはない。神は愛ということはその本性において実体において愛そのものであり、父も子も聖霊も実体において愛と言われよう。しかも、聖霊が固有の意味において愛と名づけられる。これらのことは、聖書の旧約の言葉全体がしばしば広い意味で律法と意味表示され、時にはモーセに与えられた律法を固有な意味で表示するのと類似している。

だから、聖霊や父御自身も一般的な意味では知恵であるのに、神の唯一なる御言が固有の意味で知恵と呼ばれるように、父と子も一般的な意味では愛であるのに、聖霊が固有の意味で愛と呼ばれる。神の御言、言い換えると神の独り子は「神の力、神の知恵であるキリスト」（一コリ 1：24）と言う使徒の口をとおして明らかに神の知恵と言われる。同じように、「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」（一ヨハ 4：7－8）と、それに続く、「神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。」（一ヨハ 4：13）によって、聖霊が愛なる神であることが明らかである。

神から発出する聖霊なる神は、人間に与えられるとき、彼を神と隣人に対する愛へと燃え立たせる。人間はもし神から受取るものでなければ、神を愛し得る愛を持たない。したがって、ヨハネはその少し後で、「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」（一ヨハ 4：19）と語る。使徒パウロも「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」（ロマ 5：5）と言う。

聖霊が愛なる神であることをヨハネの次の言葉から示す。①「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」（一ヨハ 4：7－8）、②「神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。」（一

ヨハ4：13) 子を知恵と呼ぶように、一つのペルソナを特徴づけても一体性を決して破らないという前提のあることを改めて注意している。

18) 完全な信仰を持っても愛が無ければ無に等しい。(18：32)

ここでは聖霊をとおして私たちに与えられる賜物の中で、パウロが語る最高の賜物¹としての愛について語る。

神の賜物の中で愛に優るものはない。この賜物のみが永遠の国の子らと永遠の滅びの子らを区別する。精霊をとおして他の賜物も与えられているのであるが、「たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。」(一コリ13：2)のである。だから、聖霊が各自に神と隣人を愛する者たらしめるように与えられていないなら、「羊を右に、山羊を左に置く。」(マタ25：33)ように、各自は左側から右側には移されない。この愛のためでなければ、聖霊は固有の意味で賜物とはいわれない。「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。」(一コリ13：1)、「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。」(一コリ13：3)とパウロは言う。しかし、それを持つ人は、言葉を語らずとも、預言を持たずとも、あらゆる奥義、あらゆる知識を知らずとも、施すべき何も持たないためか、ある困窮に妨げられてか、自分のすべてを貧しき人に施さずとも、またそのような苦難の試練に会わないゆえ自分の身を焼くため渡さずとも、御国へ導かれる。

そのように愛のみが信仰を有益なものになすのである。愛なくしても信仰は存在し得るであろうが、それは有益ではない。そのために使徒パウロは言う、「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。」(ガラ5：6)「あなたは『神は唯一だ』と信じている。結構なことだ。悪霊どももそう信じて、おののいています。」(ヤコブ2：19)という信仰から、彼はこの正しい信仰を区別する。

したがって、神から来て神である愛は固有の意味で聖霊であり、「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(ロマ5：5)この愛によって三位一体全体が私たちに宿るのである。それゆえ、聖霊は神であるが、「すると、ペトロは言った。「この金は、お前と一緒に滅びてしまうがよい。神の賜物を金で手に入れられると思っているからだ。」(使8：20)とあるように、極めて正當にも神の賜物とよばれるのである。神に導く愛、それなくしては神の他のいかなる賜物も神に導かないような愛こそ神の賜物と理解すべきであろう。

ここまでの所で、聖霊について次のことを語っている。①聖霊は神の愛と呼ばれるのにふさわしいペルソナである、②わたしたちは聖霊をとおして、神からの最高の賜物である愛が与えられる、③この賜物がなければ、いかなる他の賜物も人間を神に導くことができない、以上である。ここでは、私たちの信仰と愛、愛の実践、隣人愛についても指摘されている。

19) 聖霊が神の賜物であることを聖書は水に例える。(19:33)

聖書では聖霊を水に例えることが多い。

聖霊が神の賜物であることは、聖書ではしばしば水に例えている。『『渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。』イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。』(ヨハ7:37-39)。使徒パウロも「皆一つの霊をのませてもらったのです。」(一コリ12:13)と言う。

福音書の別の箇所では、「イエスは答えて言われた。『この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。』」(ヨハ4:13-14)とあり、水は聖霊であり神の賜物である。

イエスが与える水を飲めば永遠の命に至ることは、水が聖霊であり神の賜物の譬えと考えられる。

20) 主は人々に賜物を与え、人々の内で贈り物を受け取る。(19:34)

賜物についてパウロが詩編を引用して聖書で語ったことの解釈である。主は人間に賜物を与え、同時に、人間を贈り物として、あるいは人間の賜物を受け取ると語っている。

使徒パウロも、「わたしたち一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています。」(エフェ4:7)と言う。キリストのこの賜物が聖霊である、ということを示すために使徒は、「そこで、『高い所に昇るとき、捕らわれ人を連れて行き、／人々に賜物を分け与えられた』」(エフェ4:8)と言う。パウロはこの証言を詩編から引用したが、詩篇では「人々を貢物として取られた」(詩68:19)とある部分を、「人々に賜物を分け与えられた」とあたかも逆に表現している。その理由は、主が人々に賜物を与えられたこと、また主は人々の内で贈り物を受けられたこと、その両方が真実であることによって賜物について完全な意味が生じるからである。

主は丁度、頭がその肢体に与えるように、人間に賜物を与えられたのである。また、主は人々の内で、彼らは主の肢体であるから、贈り物を受け取られた。主は彼らのために天から呼ばれて、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」(使9:4)と言われ、また、彼らについて、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタ25:40)と言われる。だから、キリスト御自身が賜物を彼らに天から与え、また地において受け取られたのである。

さて、預言者と使徒が複数のかたちで賜物のことを語ったのは、聖霊なる賜物によってキリストのすべての肢体に、各自に特有なものである多くの賜物が共通に分かち与えられるという理由からである。各自が賜物全体を持つのではなく、或る者はこれ、或る者はあれ、と各自の賜物を持つのである。もちろん、各自はみな賜物そのものの、言い換

えると聖霊を持ち、それによって各自には各自の賜物が分かち与えられる。他の個所で、パウロは「これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。」（一コリ12：11）と言って多くの賜物を列挙している。この言葉は、ヘブル書の中で「更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心に従って分け与えて、証ししておられます。」（ヘブル2：4）に見られる。

使徒は、「高い所に昇るとき、捕らわれ人を連れて行き、人々に賜物を分け与えられた」と語った後、「『昇った』というのですから、低い所、地上に降りておられたのではないのでしょうか。この降りて来られた方が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも更に高く昇られたのです。そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教師、ある人を牧者、教師とされたのです。」（エフェ4：8-11）と言ったのである。なぜなら、彼は他の個所で言っているように、「皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。」（一コリ12：29）であるから。

しかしここで、彼は付加して、「こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、」（エフェ4：12）と言っている。これは『詩篇』が「主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて／わたしたちは夢を見ている人のようになった。」（詩126：1）と歌っているように、捕囚後に立てられる主の家である。なぜなら、教会と呼ばれるキリストの家は、今まで悪魔によって捕えられていた人々が、その悪魔から救い出されて立てるものであるから。悪魔を征服したお方自身がこの捕虜を引き連れていかれた。そして聖なる頭の肢体となるべき人々がその悪魔と共に永遠の罰の中に曳き入れられないようにと、キリストは悪魔をまず義の束縛で、次に権能の束縛で拘禁された。それゆえ、この悪魔は捕虜と呼ばれた。高いところに昇られ、人々に賜物を与え、あるいは人々のうちで贈り物を受け取られるお方がその捕虜を捕まえたのである。

ここでは、パウロが「人々を貢物として取られた」という詩編の言葉を、「賜物を与えた」と逆にして引用したことが聖霊について語ったという解釈である。教会と呼ばれるキリストの家は、キリストが悪魔を捕虜として受け取られ、悪魔から救い出された者が神からの賜物を受けて造りあげるキリストの肢体であると語る。

21) 聖霊は異邦人に注がれる。(19：35)

使徒ペテロによって異邦人に聖霊が降る聖書の記事を語る。

使徒ペテロは『使徒言行録』の中でキリストについて語ったとき、ユダヤ人の心を強く撃った。「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」という人々に対して、「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」（使2：37-38）また、同じ書の他の個所でペテロは、コルネリオや彼と共にいた人々にキリストを告知らせ、

宣べ伝えた。「ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。異邦人が異言を話し、また神を賛美しているのを、聞いたからである。」(使10:44-46) 後に、ペテロがこの自分の行為をエルサレムにいた兄弟たちに弁明したとき、次のように語って彼らは感動した。「わたしが話しますと、聖霊が最初わたしたちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです。そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか。この言葉を聞いて人々は静まり、『それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ』と言って、神を賛美した。」(使11:15-18) この他にも聖書には、使徒ペテロによって神を愛する人々に聖霊が神の賜物として与えられることを一致して証明している多くの証言がある。

この部分は、聖霊が神の賜物ということを説明するために、使徒言行録にある使徒ペテロを話題にしている。使徒ペテロの話聞いている異邦人一同に聖霊が降り、異邦人が異言を語り、神を賛美したという記事である。

22) 聖霊の賜物は聖霊であり、聖霊を与えられたものと神との一致がある。(19:36)

聖霊についての説明である。

「聖霊の賜物」という言葉は「肉の体を脱ぎ捨てる」(コロ2:11) という言葉と同じ種類の表現で、肉の身体は肉に他ならないように、聖霊の賜物も聖霊に他ならないのである。だから、聖霊は与えられる人々に与えられるかぎり神の賜物である。しかし聖霊は御自身において、たとい誰に与えられずとも、神である。なぜなら、聖霊は人間に与えられる前に父と子とに等しく永遠なる神であったからである。父と子が与え、聖霊が与えられたからといって聖霊は父と子よりも小さいのではない。聖霊は神として御自身を与えるように神の賜物として与えられるからである。私たちは、聖霊は御自身の権能のうちにない、ということとはできない。「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」(ヨハ3:8) と言われている。さきに引用された使徒の言葉にも、「これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。」(一コリ12:11) とある。ここに与えられたものという服従と与えるものという支配が存在するのではなく、与えられたものと与えるものの一致がある。

聖霊は父と子と等しく永遠の神であり、聖霊の賜物は聖霊自身であり、一人一人に分け与えられ、与えられたものと与えるものを一致させる。この各人に分け与えられた聖霊は同じ唯一の“霊”の働きとあるから、聖霊の賜物を受けたすべての人々が、聖霊によって父と子

と一致することになる。霊を分け与えることについては、この部分は、聖書の次の個所が参考になる。「神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。」(一ヨハ4:13)

23) 聖霊は神であり、固有の意味で愛と言われる。(19:37)

三位一体の愛についてのこれまでの議論のまとめである。

それゆえ、もし、聖書が、「神は愛だからです。」(一ヨハ4:8)と宣言し、そして「愛は神から出る」(一ヨハ4:7)、「わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべてなされている。」(一ヨハ4:12)と語るゆえに、愛は神から来て、私たちが神に留まり、また神が私たちに留まるようになりますなら、またもし私たちがこのことを神は霊を私たちに与えるゆえに認識するなら、霊自身は愛なる神である。

次に、神の賜物のなかで愛よりも大いなるものはなく、聖霊よりも大いなる神の賜物がないなら、当然、聖霊自身は神であり、また神から来ると言われる愛なのである。またもし、それによって父が子を愛し、子が父を愛する愛は言詮を絶して父と子の交わりであることを示すなら、父と子に共通である霊を愛と呼ぶことは最も適当な表現である。

三位一体において聖霊だけが愛ではないが、固有の意味で聖霊が愛と名づけられているのと同様に、聖霊だけが三位一体において霊であり、聖であるのではない。父も霊であり、子も霊であり、また父も聖であり、子も聖である。このことについては私たちの敬虔な信仰は疑わない。しかも第3のペルソナが固有の意味で聖霊と言われるのは、聖霊は父と子とに共通であるので、固有な意味で御父と御子の交わりとよばれるからである。

しかし、もし、聖霊だけが愛とするならば、子は聖霊の子でもあると見られるだろう。このことが極めて道理に合わないなら、やはり、愛は三位一体において聖霊だけのものではない。ところが、「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。」(コロ1:13)と言っていることから、しばしば語ったとおり、父の愛は彼の本性と実体そのものに他ならず、彼の愛の子は彼の实体から生まれたお方に他ならない。

「聖霊が愛なる神」である根拠を3つあげている。(1) わたしたちが互いに愛し合うならば、愛は神から来て、私たちが神に留まり、また神が私たちに留まること、(2) 神の賜物のなかで愛が最も大きく、聖霊より大きな神の賜物は無いこと、(3) 父が子を愛し、子が父を愛する愛は父と子の交わりである、以上である。ここでは、三位一体の前提から、聖霊だけが愛ではなく、父の愛は本性に他ならず、子は父の实体から生まれたという、統一性に関する注意が繰り返される。

24) 精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿。(20:38-39)

神の意志に対する異端を紹介し、これまでの議論の要点を整理する。

エウノミウス²は、御子が神の「意志の子」とであると語った。つまり、神は御子の生誕の原理となる偶有的な意志があると主張した。これは、私たちが前には意志しなかったことを意志することがあるという私たち自身の経験に示唆された考えである。神は永遠であるように、そのはかりごととも永遠であり、従って御自身があるように、そのはかりごととも変わらないことを私たちは理解し信じる。また、ある人は、独り子なる御言を「意志の子」と言わずに、「意志そのもの」と語った。しかし、そのように言うより、御言は実体からの実体、知恵からの知恵であるように、はかりごとからのばかりごと、意志からの意志といわれる方がよい。父なる神は意志を持つ神か持たない神かというような滑稽なことが起こるからである。三位一体における或るペルソナが固有の意味で神の意志と言われなければならないなら、この意志という名称は愛のように聖霊にこそ適しいのである。なぜなら、愛は意志と異なる別のものではないからである。

この第15巻で私は聖書に準拠して信者には十分なほど聖霊について語ってきたと思う。聖霊は神であること、また聖霊は父や子とは別の実体ではなく、父と子より小さくはないことを知っているのである。また、神が創造した被造物の考察によって、私に可能なかぎり、このような真理について理性的な根拠を要求する人々に対して、「神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。」(ロマ 1:20) という聖書の言葉に従って、神の不可視性を造られたものをとおして、彼らができる限り、知解によって見るように勧めた。特に、神の似姿によって造られた理性的・知解的な被造物をとおして、また、いわば「鏡におぼろに映ったもの」(一コリ 13:12) のように、出来るなら、出来る限り、神なる三位一体を記憶、知解力、意志において認めるように勧めた。記憶、知解力、意志というこの三つを各自は自分の精神において本性的に神的に配置されたものとして、鋭敏に観て、永遠にして不可変の本性を想起し、直観し欲求することは、精神にとってどんなに偉大なことか。それを記憶によって想起し、知解によって直視し、愛によって抱懐するのである。そこに精神は確かにあの至高なる三位一体の似姿を見出す。精神は自分が生きていること全体を、この至高の三位一体を想起し、見、愛することに、それを想い、それを観想し、それを悦ぶように、関係づけられなければならない。しかし、その同じ三位一体によって造られたが、しかも自己の悪徳によって、より悪いものに変えられたこの似姿を、すべての点で似ていると思うように、あの三位一体に比較せず、むしろ、いくらかの類似において非常な不類似を見るように、私たちは十分と思われるほど勧めてきたのである。

神に偶有的な意志があることや、子を意志として父から分離するという異端の考えを批判し、「愛」と「意志」は同じであり、「聖霊」が固有の意味で愛または意志に相応しいと結論付ける。これまでの論証を整理した上で、記憶によって想起し、知解によって直視し、愛によって抱懐することにより、精神が父・子・聖霊なる三位一体の神の似姿を見出すことを確認する。人間の精神を神と誤解しない様に、精神を神の三位一体と比較しているのではなく、精神の中には自己の悪徳によって悪いものに変えられた似姿が存在し、その中に三位一体の

神に類似したものを求め得ると注意を促している。パウロの語る私たちの罪と信仰義認を思い起こさせる。

25) 意志または愛は記憶と知解に由来する。(21：40－41)

人間の「記憶と知解」が神の「父と子」に似ているように、人間の「意志」が神の「聖霊」に似ていることのまとめである。

父なる神と子なる神、言い換えると、実体的にもつすべてのものを永遠である御言によって語り出した産出者と、御父の御言なる神を、私たちの精神の記憶と知解力においていくらかは推測することによって見るように心を配ったのである。私は知っているものをすべて、たといそれについて思惟していなくても記憶に帰し、知解には特別の仕方では思惟の告知を帰したのである。私たちが真実であると見出したものを思惟するとき、すぐれて私たちは知解すると言われる。そして、私たちはこの知解したものを再び記憶の中に置く。しかし、私たちが思惟したとき、まずこの真理を見出し、いかなる国語にも属していない内密な言葉が生まれるのは、私たちの記憶のあのより隠れた深みにおいてである。この内なる言葉は、潜在していた知解から、思惟によって顕在化する知解のようなものである。この内なる言葉は、いわば知識からの知識、視観からの視観であり、記憶のなかですでに存在していたが、滞在していた知解から、思惟によって顕在化する知解のようなものである。もし、思惟そのものは自己のある種の記憶を持たないなら、他のものを思惟しているとき、記憶に置いたものへ帰還しないであろう。

聖霊については、私は一層強力な意志である私たちの意志、あるいは愛こそ聖霊に似ているように見えるということ、鏡におぼろに映ったもの（一コリ13：12）として示したのである。なぜなら、私たちに本性的に存在している意志は、私たちを引きつけたり反発させたりする事物が意志に接近し、出会うにしたがって種々なる情念を持つからである。それでは意志とは何であろうか。私たちの意志はそれが正しいとき、何を欲求し何を避けるべきかを知っている。たしかに、もし知っているなら、疑いなく、それは記憶や知解なくしては存在し得ない自己の或る種の知識を持っているからである。

悪いことをしない愛が何を為すかは知らないということはある得ない。それで、知解力のように、愛も、私たちが思惟することによって到達し得るものが準備され隠されていると見いだすあの統制的な記憶に内在している。なぜなら、私たちが思惟することによって或るものを知解し愛すると見出すとき、この知解と愛、という二つの能力をそこで見出すからである。

それらは、私たちがそれらについて思惟していないときも、そこに存在していた。すなわち、思惟によって形成されるこの知解力に記憶と愛が内在するように、記憶の中に置かれている視観と、そこから形成された思惟の視観とを、いわば親と子のように結合する愛も、記憶と知解なくしては存在することができない対象の知識を持たないなら、何を正しく愛すべきか知らないのである。このことは、私たちが知っているものを語る時、想起によってのみ、また愛することによってのみ、思惟の眼差しはある対象に

帰還しようと努めるから、いかなる国語にも属さない真実の言葉を語るのと同様である。

「記憶と知解」を「父と子」とする類比、「意志」を「聖霊」とする類比において、いずれも、すべてが父に由来することを確認している。子が知恵からの知恵として父に由来するように、知解は知解からの知解として記憶に由来する。聖霊が父と子に由来するように、意志または愛は記憶と知解に由来する。記憶と知解と愛が相互に内在する三一性と、想起し愛することによって思惟から内なる言葉が生まれることを説明している。これは子なる御言の類比である。

【付録】引用文献・注

- 1 賜物：①天や神からたまわったもの。いただいたもの。「自然の－」②他者から受けた恩恵。「私の今日あるは叔父の援助の－だ」③よいことや試練などの結果与えられた成果。「努力の－」大辞林 第三版
- 2 [1]：訳者注にはエウノミウスはカッパドキア出身で、極端なアリウス説を唱え、御子は御父にまったく似ていないと主張、ニカイア信条に反対したとある。

付録2

「三位一体論」第8巻要旨

三位一体の信仰の真理は以下のとおりである。相互関係的に区別された三つのペルソナが一体となっている。個々のペルソナに言われることは全体に言われる。神の真理において、個々のペルソナは全体と同じ大きさですべて等しい。このような議論には限界があるので、今までと異なる内的な方法で探究しよう。(序：1)

三位一体のペルソナは、個々のペルソナ、二つのペルソナ、ペルソナ全体において大小の関係は存在せず、真理の実体と偉大さにおいてすべて等しく、変化せず、永遠である。このような三つのペルソナを持つ神が唯一であるということを、空間、物体に対する私たちの認識で考えてはならない。神は心が見る光のような真理であるが、物的な表象で遮られ見えなくなる。私たちは善きものを愛す。私たちには善そのものが刻印されているから。善き心になろうと欲する時、心の中に留まっている善に向かって回心する。変わらざる善、最高の善が存在することは真理である。なぜなら、人が善を見失っても回心するからである。心は善であり、善から背く前にすでに存在しており、私たちは善の中に生き、動き、存在する。(1：2－3：5)

しかし、誰が知らないものを愛するだろうか。私は問う。知られないものが愛され得るのであろうか、と。もし、それが可能でないなら、誰も神を知る前には愛さない。神を信じて心が清められない人は、神を見るのに相応しくない。私たちは聖書によって、まだ見ぬ神を心で信じ、望み、愛する。虚偽なるものを望み愛することのないよう注意しなければならない。見たことのないものを、読んだり聞いたりして表象を作ることは有益である。(4：6－7)

私たちは、人となった神の子を信じ、その信仰が虚偽ならざるように思惟する。私たちは、種的・類的な知識によって、処女マリアからキリストが生まれたと信じる。心が自分で作りだしたものを愛することのないように警戒しなければならない。知らない三位一体を、知られているものの類似と比較に基づいて信じるのかが問われる。(5：7-8)

私たちが使徒を愛するのは、今も生きている義なる心を愛するのである。私たちは自身が心を持つから心を知り、他人の心を自身の心に基づいて知り、信じるのである。義人でない人が義人を愛するのは、義人でない人も義人を知っているからである。義とは心の或る美しさであり、義人とは何か答えられるのはその人自身だけである。見たことの無い都市を想像して、その都市を見たことのある人々に確かめて信じる。しかし、義人とは何かということ想像して他人の判断で認めることはできない。義なる心になるためには、各自に形成され直視できる形相に固着することではなかろうか。私たちが義人と信じ愛するのは、自分が認め知解する形相と真理を愛するからである。彼は義人であるか義人であり得るために、自分自身のように隣人を愛する。(6：9)

愛と欲望は異なる。真実の愛とは、私たちが真理に固着して正しく生きることである。人間への愛のため、主イエス・キリストのように兄弟の益となるため死ぬ模範がある。聖書がしばしば二つの戒めの代わりに一つの戒めを置くのは理由がある。例えば、神の愛のみを語り、神を愛する人は神の愛が注がれていると言う。一方、隣人愛のみが戒めを完成するように語り、隣人を愛する人は必然的に神を愛すると言う。世を支配する権能によって神を求める人々は、神がおられる内面を見捨て遠く散らされる。彼らは高慢で能力を手に入れることを欲し、全能者につながる敬虔な意志を持たない。主イエス・キリストは空しい高ぶりではなく堅固な謙虚へと私たちを導く。私たちは自分たちのもとにおられる神を問い求め、愛によって神と共に憩うのである。(7：10-11)

兄弟を愛することは、愛する兄弟よりも、そのように愛させる愛のほうをよく知っている。現在の、内的で、確実な神が、愛する兄弟よりも知られているのである。私たちは神を抱き、すべての神の僕を聖性の絆によって一つになし、私たちと彼らを相互に結合し、私たちを神に服従せしめるのが愛である。私は神の愛を信じ、自らの愛を見ても私は三位一体を見ない。しかし、君が私の愛を見るなら、君は三位一体を見る。君が三位一体を見ることを君に気づかせるため、すなわち私たちが愛によって善へ動かされるために三位一体を現在化しよう。私たちが愛として自己を愛するなら、何も愛さない愛は存在しないから、私たちはまず身近な兄弟を愛する。使徒ヨハネは、「神は愛である。」と言い、兄弟愛そのものにおいて神が理解されるという。兄弟愛そのものが神であり、兄弟を愛させるその愛を先ず愛さないということはあり得ない。二つの戒めは、愛を愛する人は神を愛し、兄弟を愛する人は必然的に神を愛するという関係にある。兄弟を愛さないということが神を見ないことの原因である。兄弟を霊的な愛によって愛するなら、愛そのものであられる神を内的な眼で見るであろう。兄弟を愛さない人には愛が欠けているから神を愛することは出来ない。私たちと比較にならないほど神を愛し、私たちと同じように隣人を愛さなければならない。私たちは神を愛

すれば愛するほど自分自身を愛するのである。私たちは神のために神を愛し、同じ愛で自分自身と隣人を愛するのである。(8:12)

私たちがパウロの言葉に心が燃えるのはなぜであろうか。私たちが神の奉仕者の生き方についてのある形相を愛しており、この形相に彼の生が一致していると信仰によって思うからである。それによって、私たちは烈しく形相そのものの愛へと促され、そのように生きることを確信して願望する希望へと駆り立てられる。かくて、私たちは心を熱くして神を愛すれば愛するほど、神において義の不可変的な形相を観る。だから、信仰はより堅く愛されるように神の認識と愛に有効なのである。(9:13)

聖書の愛は善の愛である。愛する人と愛するもの、それらを一つにし、あるいは一つにしようとする愛がある。精神においても、愛する人と愛するものと愛がある。三位一体を問い求める場所を精神に見出した。(10:14)

謝辞

最後に、本研究が継続して集中できる環境に配慮してくださった浦和大学の教職員の方々、夏期休業期間中に快適な研究の場を提供してくださった本学海外研修機関United Hawaii Collegeのスタッフのみなさん、特に、三位一体論の英訳を急いで日本に郵送してくださったホノルル在住の神学の友Mr. Conrad Koji Moriwake、これらの多くの方々の協力を頂きました。ここに心から感謝し御礼申し上げます。

Summary

A Study on Augustine's Concept of the Trinity and Social Welfare — Study Note 2 —

Shuichiro Kunori

This paper is one of a series of discussion on the contacts of Augustine's Trinity Theory and social welfare. In this paper, his discussion of the Trinity (vol. 15, chapter 17-21) will be supported, along with related information in vol. 8. He argued that the "Father, Son, and Holy Spirit" of God is similar to the "memory and understanding and will" of human beings. This idea is called the psychological analogy of God in the Trinity. In this paper, an analogy of the "will or love" and the Holy Spirit are discussed, in addition to the will of good and evil. In vol. 8, corresponding to the introduction of his Trinity, Augustine discussed three elements of the Trinity as follows: a lover, his loved object, and his love for the object. His manner of exploring the three elements in the Bible and the human spirit is very creative. Thus, it is obvious that one of the important contacts between his theory and social welfare is neighborly love. According to one specific study on his theory, it became clear that we must keep faith and in addition find various forms of neighborly love in order to love one another in a world of diverse values.

Keywords Augustine, the Trinity, Social Welfare

(2016年5月19日受領)